

山上憶良論

一、可能性について

— その環境 —

山上憶良はその生涯を野望と挫折との相剋の中で生き続けたのであった。天平五年、七十四歳の時、瀕死の重床にあって詠んだ辞世歌とされる歌

士やも空しかるべき万代に語り継ぐべき名は立てずして（巻六九七八）

を読むと瀕死の床にありながらなお現世への執著を捨て切れず嘆息と共に涕を拭う憶良の悲惨な風采が彷彿として来る。憶良の時代とその閨歴とを調べて行くに従って私はこの歌が次第に好きになって来た。彼の人間の赤裸々な姿が最も單的に鮮明にここには表現されているように思われるし、又如何にしても救い難い人間の苦悩の様相がこの上なくリアステイックに言い現わされているのを感じるのである。全作品の中で憶良が最も言いたかったのは他ならぬこの歌だったのではないか。知性、教養にわずらわされない本当の声を聞く思いがするのである。

瀨戸井 誠

それにしてもこの歌は余りにも赤裸々でありすぎる。この歌だけを読んだのでは憶良に知性があり教養があったと言っても信じられないに違いない。この歌の評価も必ずしもよいものばかりとは言えない。川崎庸之氏はこの歌を辞世のころの歌とすればと前提して「憶良の思想的遍歴の結果もその到達したところは意外に浅かったものと言われるであろう^{註1}」と言われるし、西郷信綱氏は「立身出世根性を棄て切れずにいた^{註2}」と言われる。私は勿論こうした評価の仕方には組しないのであって、この歌に思想的遍歴の結果を認めようとするには賛じ難い。古代人としての憶良に思想の存在を認めることに、その知的性格、教養の深さは認めるにしても、躊躇せざるを得ない。又西郷氏の言われる、立身出世根性を捨切れずにいた、ことに私は少しも非難の気持はないのであって、終生立身出世を願ひ続け現世から離れられなかった憶良にむしろ劇しい同情を覚えるのである。

しかしそれにしてもやはり余りに赤裸々すぎると思うことには変りない。憶良的特質と言われる知的性格も教養の傾向も見出すことが出来ない。

そうした憶良的特色をもつ歌の典型の一つとして私は次の歌が好きである。

世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば
(巻五、八九三)

貧窮問答歌の反歌であるこの歌は単に好きと言うばかりでなく憶良を考える場合極めて重要な意味をもつものと考ええる。即ち憶良的特色を最もよく備えた歌の一つであり従って問題として取り上げるにも最も適したものと思われるのである。

「士やも」の歌と「世間を」の歌とは非常に対照的である。前者が積極的に現世に繋がって行こうとするのに対し、後者はむしろ現世否定の立場からの言である。つまり前者は憶良の環境の中の可能性の面を推し進めて行った際の歌として、又後者は環境の中の、時代の制約を認めざるを得ない立場の歌として考えられるのである。

こうした相反する二つの傾向の作品が一人の作家の作品の中に含まれているのは実は奇妙なことである。勿論この二つの傾向の作品は今例に上げた二首の歌ばかりではない。「士やも」の系列に入るものとしては「敢へて私懷を布ぶる歌」などが挙げられるし「世間を」の傾向のものとしては「老いたる身に病を重ね、年を経て辛苦み、また、児等を思ふ歌」の反歌の諸作などが挙げられる。何故憶良にはこのような二つの面があるのだろうか。それを考えてみたいのである。

そして、この点は実に既に先学者達によって指摘されているものなのである。川崎庸之氏、清水克彦氏などの論考がそれであり、

いずれも憶良のこの傾向を矛盾するもの、曖昧な思想、と言われているのである。しかし私はこの点こそ最も憶良的特色を明瞭ならしめているものであり、このことの究明を通して憶良を考えて行けば何らかの成果を得られるのではないかと秘かに考えているのである。

「士やも」の歌が物語っている通り、憶良は生涯現実的執著から離れられない不幸な人間であった。この歌を涙と共に口吟んだのが七十四歳の時であったことを思うと終に人間的苦悩から脱れられなかった憶良の悲惨なまでの生涯が思われてならないのである。普通ならば現世への執著から苦悩するのは青年に限られている。年と共に諦念が強まって来てこの種の苦悩から離れるものである。或は現実から目を外した地点に新たに自己の生きる場を設定して適応するのが通常である。例えば旅人が、酒を讀め亡妻をしのび、遊仙窟の世界に遊ぶ、そうした超現実的世界を設定することによって、新興藤原氏に蚕食されつつあった古豪族生き残りの名門大伴氏の悲しみを緘晦しようとしたことなどがそれである。憶良は諦念にも緘晦にも全身を委ねることが出来なかった。それが生涯の悲劇の原因であった。何故憶良は旅人のように生きられなかったのだろうか。

人間は、またその生涯はその資質と境遇とのからみ合いによって決定される。だから憶良の場合、旅人のように容易に現世を放棄してしまうことの出来ない劇しい欲望を彼がもっていたからだと言えるかもしれない。だがその欲望さえ環境の大きな力によって強められ弱められ動揺するのである。

環境、それは可能性である、生得的諸要素（資質）が不変のものとするならば環境の様相によって人格や生涯は変容して行くのである。即ち環境は人間の成長・発展、或は停滞・退化を可能ならしめる与えられた場なのである。それ故に環境の相違によって例えば同一の資質をもった者でもその人格は変わり得ることが予想されるのである。

憶良は旅人のように現世を放棄できなかった。その理由を環境の面から言ってみれば、旅人の世界は、由緒正しい貴族貴族として大きな可能性、時代の主流となり得る可能性を含んでいるようでありながら、藤原一族の抬頭と隆盛とによって昔日の地位と榮光とはもはや取り返し得ぬまでになっており、一方憶良の世界は、ごく狭い極限せられたものではありながら現実的な可能性、官位の昇進はなお余裕されていたのであって、先輩、同輩で彼よりも地位の昇った者をその周囲にも幾人も見ることが出来たのである。

ここに旅人が大体に於いて現世から離れた場を設定して輶晦せざるを得なかった理由があり、憶良が世間を憂しと思ひ、耻しと思ひながら結局現世を捨て切れなかった原因があるのではなからうか。そればかりでなく憶良はとにかくも無位無姓から「卑姓公民出身の官吏が一生の労功を積んで漸くその晩年に酬はれる極官」と言われる従五位下の位まで進み、その間遣唐使少録に選ばれて渡唐し又東宮侍講に選ばれ、伯耆守筑前守を歴任して来たのであった。当時であつてはその出自から見ればその可能性をほぼ極限まで歩いた一人であつたと言えるであらう。そうした経歴が

もたらす可能性の認識の仕方が、自己の置かれた社会的境遇の認識を十分に有しながらそれでもなお終生可能性を全部放擲してしまふことを許さず、従つて現実的苦悩から遁れられなかったのではないかと考えられるのである。

憶良の苦悩は晩年に至つて酷しく襲つたものと思われる。その出自としてはとんど極限の昇進を得た憶良も晩年には全く昇進の機会がなかった。苦悩は可能性が全然ない時には決して興らぬものと思われる。可能性が眼前に展開されていながら掌中でできないとき苦悩は決定的に強烈になるのである。

このように死ぬまでその可能性を捨て切れず苦悩の淵から遁れられなかった、つまりその環境に適応できなかった憶良なのであるが、その由つて来るところは資質として憶良の側にもあるが、又その資質に働きかけ助長せしめたものとしての環境の側にもあるわけなのである。その環境を、可能性とその挫折との関係から見て行こうとするのである。

憶良は通説に従えば斉明天皇六年、六六〇年に生まれた。大化の改新の十五年後にあたる。この七世紀の後半に憶良はその青壮年期をすごした。

この時代、憶良が人となった時代は各方面で動揺するものを失わず、それだけ可能性の残存していた時代であつた。聖徳太子以後中央集権への道を歩み始め、大化改新、壬申の乱と次第にその可能性はせばめられて来てはいたが、それでも古代律令国家はまだ強固な力をもつものではなかった。壬申の乱に参加した地方

豪族達の意欲が大化以前の氏族分権の再現にあったとも言われるように革命すればし得るこの可能性をなお抱かせ得るような状態であった。憶良が青・少年期をこの動搖をふくむ時代に生き、高木市之助博士も言われる通り、主情的反撥的つまり浪漫的な、古代的な性格をもつ天武天皇の支配する時代に過したという事実も重要である。天武天皇の施策は性格的には天智天皇と全く対照的であったにもかかわらず天智天皇の遺業をうけつぎ更に強力に推進しようと企図したものであった。けれども一方では壬申の乱に際し激しく流動した地方豪族層の巨大なエネルギーを朝廷内部に吸収しようと計ったり、英雄時代への回想をその成立の意義の一つと認められる古事記の編纂を企図したりした。

憶良はこのような動搖を秘め、可能性をふくむ時代に生きた。しかも青少年期のころに時代の可能性を信じたのではなかったかと考える。もし可能性を信じなかったならば、無位無姓の彼が、後に遣唐使少録に選ばれ、東宮に侍せしめられる程の学問と教養とは積まなかったであろう。努めればそれに匹敵する酬いが得られるという信念、それが青年期の彼を決定し、ひいては生涯を決定したのではあるまいか。この可能性の実現という意味では憶良は幸福な人生を過したのではなかったか。と言えは憶良の酬われぬ悲劇的な生涯を知る者には肯ずけないはずである。無論私もその生涯を知る者である。だからその全生涯が幸福であったというのではなく、その出自に比して彼の昇進が非常に幸運だったのではないかと思うのであって、しかもこの幸運が晩年の悲惨な苦悩の前提となっているのであり、それ故に老年に至ってなお現世へ

の執着を棄て切れなかったのではないかと考えるのである。憶良は彼の有する可能性のほぼ最大限を一つ一つ登りつめて行った。そうした自信と得意の中から晩年に至って、社会的制約の厳しさに直面し、憂し、耻し、辛けしなどの語を吐かねばならぬ悲嘆の中に突き落された。ここに憶良の生涯の特色があり、その作品の由って来る特質がある。彼が得意から失意へと移り変わる生涯を具体的に述べつけ辿って行ってみよう。

憶良の現世への登場は、大宝元年遣唐使少録に任ぜられた時であらう。無位無官から遣唐使少録に選ばれた時の彼は確かに「彼の自信も強化され、社会的要求の心も次第に強められて行ったであらう。」^{註6}時四十二歳の憶良ではあったが、それは叙任が余りに遅いと思われると同時に一方それだけ彼の身分が低かったことを証しているであらう。当時彼が官人となっていたであらうことは三四(巻一)の歌、一七一六卷(九)の歌などの関連から、憶良が川島皇子か、作者は決定されぬにしても、そのことだけは推定されよう。官吏とはなっていたものの当時の憶良は恐らく出世の道の遠いことへの失望と、実力を持ち期待とをもって懊悩していた時代ではなかったか。或はすでに壮年期に入って、若い頃の野望は一応心の奥深くに潜められてしまい、失望が諦念に変わってごく平穩な心となっていたかもしれない。当時の歌作がごくわずかしかなかったとしても平穩な心でいたことを証するものかもしれない。憶良は和銅七年五十四歳の時従五位下を叙けられたのであるがそれ以前の歌は、六三、一四五、一七一六(三四)の三首しかない。作られていても集に採録されなかったのかもしれないが

ただこの三首はいずれも憶良的特色を有たないものばかりである。三四と一七・一六歌との作者が編纂者によつて終に決定されなかったのはそこに憶良的特色が見出せなかったからに外なるまい。九〇六歌や志賀白水郎歌が憶良作かと記されていることと考へ合せれば興味深い。このように五十四歳以前には憶良が憶良的と後に認められるような特質をなお有つに至らなかったというこの意味は、彼がまだ現実に可能性を信じるに至らず、従つて可能性とその限界との相剋による苦悩はその身に深刻には興つていなかったのではないかと考えられるのである。時代の可能性を自己の可能性と結びつけて考えるには自己の現実が余りに八方塞がりと思われたのではなかったか。もしこの頃彼が瀕死の重床にあつたとしても恐らく、「をのこやも」の如き悲痛な歌は口吟しなかつたであらう。

かくして大宝元年を境にして憶良は可能性の世界へ一歩足を踏み入れたのである。と同時に、いや、ということとは彼が苦悩の世界へも足を一歩踏み込んだことになるのである。可能性を信じない者に挫折はあり得ない。野望を持たぬ者に絶望はあり得ない。可能性の瞥見が野望と絶望の渦巻く世界へ引摺り込むのである。憶良もこの時初めて可能性を瞥見したのであらう。その結果可能性が自分のごく身近にあることを知り、そこで渡唐後或は帰国後以前にも増して学問に懸命に励んだのではないかと想像される。それが可能性が一部でも実現した者の常である。恐らくその成果があまり朝廷にもその実力は認められるようになったのであらう、大宝元年の無位から和銅七年従五位下に叙せられる以前、和銅六

年までの十二年間に正六位下まで進んでいたのである。

養老律令によつて定められた位階は正一位から初位少下まで三十階あるが、初位少下から従五位下までは十七位階あることになる。大宝元年遣唐使少録に任ぜられた時の無位からその時初めて叙位したものと見れば、憶良は十七位階を十三年間で通過したことになる。これは四十二歳までの不遇に比して何という昇進であつたらう。この期は恐らく公務に精勵し歌作の違さなかつた期間であつただらう。いやこれ程順調な生活ならば歌作の必要は、公の或は交際の歌以外には不必要であつたらう。しかしこのことが後の憶良にとって全く没交渉であつたわけではない。順調な昇進が身分を超えての可能性をまで幻想させてしまつたかもしれないのである。つまり死ぬまで「名を立てずして」と慨嘆せしめた原因がこの期の順調な昇進、可能性の実現への錯覚にあつたのかしめないものである。

その後もなお順調な生活が続く。二年後の靈龜二年には初めての国司伯耆守に任じられている。更にその五年後養老五年には侍東宮に任じられている。これは憶良にとって非常に名譽なことだつたに違いない。同時に任命された者の中には紀朝臣清人、山田史三方、越智直広江、塩屋連吉麻呂ら当時一流の学者がふくまれている。

この期が憶良にとって最も得意な時代だったのであらう。東宮侍講の一人として、宮廷の七夕宴にも連なり、当時第一の権門左大臣長屋王邸に於ける七夕宴にも出席したことなどが万葉集巻八によつて知られる。巻八一五一八の左注に、右養老八年七月七日応

令、とあり、同じく一五一九の左注に、右神亀元年七月七日夜左大臣宅とある。

神亀三年筑前守となつて筑紫に下る。以後旺盛な作歌意欲を示してその全作品のほとんどがこの時以後に制作された。だが筑紫に下つてからも神亀五年日本挽歌が初出するまでは憶良に作歌がない。このことはその最初の数年がなおまだ完全なる挫折とはならず、昇進の可能性或は帰京昇進のことなどを信じていたのであるうか。それが、神亀三年から天平四年まで引き続き筑前守在任であつたとすればその期間は六年近くにもなるわけであり都を遠く離れた心細さに加えて、自哀文に見られる如く十余年も病のために苦しめられていたのであり更に老年でもあり、意欲だけは一向に衰えないが少しも昇進しない地位のことを考えて次第に挫折感が深まつて行つたものではないかと想像されるのである。

この挫折感の深まりが旺盛な作歌意欲となつて転生したのであらう。従つて当然作品内容も自分ではどうすることも出来ない壁にぶつかつて苦悩する人間を描くものや、社会的に不遇な者への同情などとなつて現われているのであらう。

この挫折感を深めた原因を更に詳しく考えてみよう。この挫折感こそ憶良の作歌動機の主なるものの一つであり、高木博士の言われる旅人への反撥感情もこの挫折感を媒介として初めて憶良の内部に発生したものであり、もし憶良に挫折感がなかったならば旅人への反撥感情も興らなかつたのに違いなく、たとえ起つたにしてもそれは制作動機とはならない程小なるものであつたのに違いないのである。年々自己の可能性の限界がせめられ将来の到

達点もほぼ予想されるような失意の状態にいた際に、旅人という世界の違う大きな可能性をその身に背負っている人間が憶良の身近に出現したことが彼にとっては重大であつた。「士」が立てるべき「名」とは恐らく旅人の得ているような高位高官の地位を意味しているであろう。勿論その時の旅人がその立場としてはもはや可能性が極限され、その意味では憶良の挫折感と変りない憂鬱の中にいたであらうことは、世界の異う憶良には理解できなかったに違いない。理知では理解できたとしても感情的に釈然とすることは不可能だつたに違いない。旅人の現在の地位そのものが既に憶良にとっては「士」が立てるべき「名」に他ならなかつたのであらう。

この旅人と憶良との世界の相違、憶良が羨望し反撥した旅人の世界とは、具体的にはどのようなものであつたか。滝川政次郎氏は古代貴族を貴姓貴族（真人、朝臣、宿禰、忌寸）と卑姓貴族（道師、臣、連、稻置）に分けていられるが、旅人と憶良との世界の相違はそのまま貴姓、卑姓の世界の相違となるのである。

大宝律令には官位の昇進に於てその德行・才用が重んじられ、門地は問題にされないことが規定されている。^{註8}しかし実際にはそのように理想的には運用されなかつたらしく、卑姓貴族には自から立身の限界があつたし逆に貴姓階級には種々の特典が認められていたのである。まず任官に際しては薩位の制度によつて身分の程度に順つてその位階が差別される。即ち三位以上の有位者の子孫及び五位以上の子は二十一歳に達すれば自動的に従五位下以下^{註9}従八位以上の位に叙せられた。

この従五位下は前述した如く卑姓出身者の数少ない成功者が一生の功績によって漸くその晩年に酬われる位階であり、また従八位下の位は「明経^{註10}の學生が十年螢雪の功を積んで漸く贏ち得られる官位であつた」のである。従つて貴姓貴族の有する従五位下と卑姓貴族のそれとは、或は他のすべての位階の場合も、貴姓者と卑姓者の有する位階の実質は大いに異なると言うべきなのである。卑姓者の位階がすぐれた才能とそれに倍する努力との結果得られたいわば個人評価を意味するものであるのに対し、貴姓者のそれはその個人には関係ない単に家柄の象徴にすぎない場合が多いのである。

卑姓貴族或はそれ以下の階級の者の昇進はこのように差別されていた結果容易に昇進されず又その限界も定められていたのであるが、更にその官吏になる道さえ非常にせびめられていたのであった。普通官吏となるためには國家試験に合格しなければならぬが、その國家試験を受験する有資格者も限定されていて、諸國又は諸司の貢人、大學の舉人に限られていたのである。諸國又は諸司の貢人がもし不適任であると判定されるとその貢人を推薦した者に重い罰則が設けられていたと言ふから、實際に受験し得る者は大学生がその大部分だったものに違ひない。その受験の道に通ずる大學に入学する資格も、五位以上の子孫、東西吏部の子、八位以上の子で情願する者及び國學の終了者に限られていた。

このように實際に官吏となり得る者はごく限定された範圍の者にすぎず、しかも稀有の才能に恵まれて秀才上々第に及第した者の位階でさえ正八位上にすぎず、これは正五位の嫡子が二十一歳

で得られる位階よりわずかに一階高いだけなのである。任官後の昇進も貴姓者卑姓者のそれは大いに異なり、卑姓者は生涯かつて五位に昇るのがせいぜいだったのである。^{註11}

こうした貴姓・卑姓二つの世界をそれぞれ代表する者として旅人・憶良が上げられるのである。同じ律令制下の官吏でありながらその出自の相違によつてまるで異なる世界の人に対するようにその対遇は差別されるのである。しかも憶良は彼の階級の有つ可能性をほとんどその極限まで登りつめた経歴をもつ者であつた。

又それはそれ相應の能力もありかつ努力もしたことであろう。従つて自負・自信も当然強いものであつたろう。人生に於て可能性の存在が希望と努力とを生み、同時に苦惱をも將らすように、自負・自信は大いなる欲望をもたらし又嫉妬・反撥・抵抗等の感情も生むものである。憶良の自信はその境遇によつて得しめられたものではない。生まれながらにして社会的に認められていた地位によるものではない。才能と努力とによつて歩み築き上げられて行つた自信なのである。従つてそれだけ精神内部に深く喰ひ入つていたのであろうことは考えられるし、社会的制約、身分的不平等などによつて個人の価値が無視され抹殺されたならば必ず強い嫉妬反撥、抵抗の感情を生むべき性格のものである。このような感情が身近に存在する貴姓貴族の代表の一人としての旅人に對し、反撥感情となつて向けられたものなのであろう。

挫折感を決定的にしたものとしてはこの身分的制約が第一のものであろう。と共に考えねばならないのは憶良の地位が必ずしもその極限ではなかつたという事實である。従五位下が卑姓の出身

者としては極限の位階であったと言われていることは前述した通りであるが、特殊な存在かもしれないが卑姓にしてその位階を超えた者も又かなりの数を認めることが出来るのである。今憶良が從五位下に叙せられた前年和銅六年以後、天平五年彼が歿したと思われる二十年間に卑姓の者で從五位下及びそれ以上に叙せられた者の数を統日本紀によって数えてみると次のようになる。

正五位上 一名。正五位下 四名。

從五位上 九名。從五位下 二八名。

合計 四二名。

の中には同一人が昇叙した場合も二・三あるので合計数は多少減ずるがとにかく四位以上の位に至った者はないながら從五位下以上に昇った者が十四名もいたのである。このことは非常に重要なことで憶良にとって昇叙の可能性はなお充分残されているように感じられたに違いないし、自負・自信の強かった彼は恐らくこの事実に極度に敏感だったに違いないのである。

なお滝川政次郎氏の「日本社会史」は奈良時代七十四年間に三位以上の官位に叙せられた者をその出身別に分類している。参考のためにそれを掲げてみると次のようになる。

合計百十二名の中

十八名、親皇、諸王。

二十二名、大伴、石上、石川、巨勢等、旧大臣、大連の子孫。

四十七名、藤原、大中臣、阿部、紀等、旧卿大夫家の子孫。

十三名、橘、文室、水上、多治比等新に皇族から派生した家。

四名、大野、小野、栗田等、旧臣、連家の子孫。

七名、弓削、県大養、飯高、高麗、佐伯等直、首の出身。

これを見ると百十一名中卑姓階級出身者はわずかに七名である。この時代がいかに身分の差別が厳しく階級の交流を困難ならしめていたか即ちいかに貴族社会的であったかがよく理解される。と同時にやはりわずか七名ではあっても卑姓の者で三位以上に昇った者が居たという事実は注目しなければならない。身分、階級の制約は厳しく有能な卑姓者の昇進を妨げていたのであったがしかしその間隙を縫って卑姓の出で最高の地位もしくはそれに近い位まで昇った者もあったのである。例えば從二位右大臣にまで累進した吉備真備同じ頃僧正の位についた僧玄昉はいずれも地方豪族の出であったし、又太政大臣禪師から法王に進み帝位までねらったと言われる僧道鏡も河内国の一豪族の出身であった。

このようにその世界が身分によって極度に制限されていたがなおかつそうした可能性が残されていた所に生涯現世的執著から離れられなかった憶良の悲劇の基盤があったのではなからうか。自分の地位より昇進する同階級者の例、又同じく卑姓の出身でありながら権力の座近くまで進み得る可能性、そうした例を見聞するにつけて現世的な野望は燃え続けたのであろう。もしそのような例或は可能性が全くなかったなら諦念に身を委ねて安心することも割合容易であったに違いない。

憶良の不幸はその意欲が時代の枠を超えていた所にある。同じく不運な境遇から心ひかれる歌を残した旅人、家持らと不幸というものの意味に於て質的に異なる所以である。大伴家の悲劇は個人的意欲にははばかかわりないものであった。現状維持がむしろ

理想であつて現在の地位が時代の流れ、藤原氏の繁栄によって次第に押流され侵蝕されて行く、それを目のあたりに見なければならぬ末期者の悲劇であつた。従つて不幸の質は憶良のそれよりも遙かに強いものであつたかもしれない。ただし旅人も家持もそうした不幸に正面きつて取り組むことをしなかつた。家持が現実的にその立場を回復しようとしたとき、「歌わぬ人」^{註13}とならざるを得なかつた。これに反して憶良の不幸は厳しく個人的なものであつた。自らの欲求の強さによってその欲求を阻止するものとしての社会に終生適合できなかつたのであつた。

われわれの生きる環境は常に相反する二つの面をもっている。即ち積極的な生を可能ならしめる可能性の面とその可能性を阻止し妨害すべき制約の面とである。この両面の相剋はしかし普通はいずれか一方が強力なために自覚されないことが多い。可能性が強くまたその自覚ある者はその生も当然積極的なものとなるし反対に制約の面をのみ常に自覚する者の生は消極的否定的とならざるを得ない。そしてこのいずれかへ自己の生き方を定着させることによってその生を安定ならしめるのである。大伴家の場合は、その対抗者としての藤原氏一族の勢力がもはや決定的な強さにまで到達し、大伴家は対抗者としての地位すら失なわれつつあつた。これは即ち旅人の生きるべき可能性を阻止する制約の強力さを意味するものであり従つて彼は現実には背を向けた地点に和歌的世界、遊戯の世界を設定することによってその環境に適合したのであつた。

ところが憶良の環境はこの観点からすれば非常に異質であつ

た。憶良という個人にこの相反する両面即ち可能性と制約とが同時にしかも拮抗する強力さで働いたのであつた。旅人の環境に見られたような一方的な片寄りが見られず、可能性と制約とが等しい力をもつて左右から引き合つていた故に現実を放棄することも出来ず又可能性を実現することも出来なかつたのであつた。憶良にはなまじい可能性が存在したことによってその悲劇性が強められたと言える。抗し得べくもない時代の流れがその可能性を跡形もなく押し潰してしまつたならば彼も旅人と同じく現実を背を向けることによって適合し安定することが出来たかもしれない。

しかし時代はなお動揺するものを内に潜め政治面で社会面で文化面で動揺するものの目立つ時代であつた。無姓の或は卑姓の階級に属したことが実はその動揺を可能性と思ひ込ませた理由であつたかもしれない。大伴家にとってその動揺は決して可能性ではなかつた。逆に現在の地位を蚕蝕して来る時代の蠢動にすぎなかつた。貴姓貴族達にとって動揺はまず可能性となりその可能性が実現した時には彼等はたちまちその動揺・可能性を怖れねばならぬ立場となつた。卑姓者にはその限界が厳然と規定されていた故に一の可能性は生涯可能性のまま存在し続け他の何物にも変貌することがなかつた。終生実現されることがなかつたからである。憶良も終生この実現されることのない可能性の実現を夢見た。勿論常にそれへの反省がつきまとい、つまり社会的制約の面の自覚が彼の諸作品に数多く表われている否定的言辭となつた。憂し、耻し、すべなし、辛けし、障るなどの語がそれである。それらの言辭が多く仏教思想の影響をうけた結果であらうことは事実かもしれ

れない。だがそうした言辭を用いながらも生涯現実から離れられなかった事実が示す意味は極めて重要である。

環境つまり可能性と制約とが憶良に働いた作用の意味は以上のようなものであった。可能性を押しつけて行つた際の歌として「土やも」の歌があり制約（挫折）の面を自覚した際の歌として「世間を」の如き作品がある。この二つの傾向、相反する、矛盾するそして思想性の曖昧さを指摘されるこの二つの傾向の、意味と理由とをこの環境の面から考えたのであった。そして一応の結論は得られたのだが勿論これだけでは片手落である。環境だけが作品を決定するのではない。環境の作用のし方は、受け取る側の各個人によって大いに異なるのでありその個性の考慮なしにその文学を考えることは出来ないのである。

二、矛盾の意味

——その個性——

憶良はなみ外れて欲求の念の強い人間だったのではなかったろうか。人間には比較的に言つて欲望の劇しい者と割合弱い者とがある。その原因としては生来的要素と後天的即ち環境の様相によつて将来せしめられた要素とが考えられる。そしてその両要素は常に不即不離のものであつて両者のからみ合いによつて欲望の強さと質とは決定されるのである。憶良の場合その欲望を強める環境の面に關しては既に述べた。ここではその先天的要素、勿論この要素も環境の様相によつて変質し得るものではあるが、環境の面よりも先天的要素の影響をより大きく受けるものとしての個性

について考えて行こうとするのである。

欲求の念が強く生まれついた人間は不幸である。その欲求が強ければ強い程生涯かかつても欲求を満足する点には到達し得ない。自己の欲求が容易に環境社会と妥協し得る者はその妥協を完了した時から苦惱とは絶縁となる。それ故欲望を去ることによつて精神の安定を得ようとする思想は正しいものと確信するのである。自己の欲求によつてわれわれ自身がいかにも苦しめられているかは量り知れないほどであらう。欲望がなければわれわれの精神生活は至極平穩なものに違ひないのである。

その意味で憶良は不幸な人間だったのではないかと考えるのである。欲求の念が強く、時折は自己の制御も効なくその欲求が意識の最上部即ち表面に姿を現わして憶良自身を苦しめたのではなかったか。七十四歳の時の辞世歌「土やも」の歌はそのような場合の一例を示すものではなかったろうか。普通ならば七十歳を過ぎてなお現世的執著から離れられないなどということははずである。しかも左注によれば「涕を拭ひ、悲しみ嘆きて、この歌を口吟^{くちん}」つたのである。余程の現世的欲求がなければこのような悲嘆はなかったに違ひない。その他「敢へて私懷を述ぶる歌」三首中の一首

吾が主の御たま賜ひて春さらば奈良の京に召上げ給はね（巻五 八八二）

なども同様な憶良の面を明らかに示しているものである。この歌など全く憶良独得のものと云えると思うしその独自性は彼の個性、この場合で言うならばその欲求の強さであると考えられ

る。官位の昇進を上長に頼み込む類の歌は集中他に一首も存在しない。憶良の卒直な性格、というよりも知的な諧謔性によるものとも思われるがそれでもやはり強い要求がその底に藏せられていた結果なのではないかと想像されるのである。

憶良は「世間」というものに強い関心を抱いた人であった。その作品の中に「世間」又は「世の中」の語が頻出する事実からそれは断定できるのである。しかも憶良はその「世間」を否定的に認識していたのであった。常なきもの、術なきもの、憂けく辛きもの、との認識であった。この否定的な認識の仕方実は世間に関心を抱く者の必然的な認識方法なのではあるまいか。世間に強い関心を抱きしかもその世間を肯定的に認識する、ということはずであるまいと考える。世間を肯定的に認識する者は必ずや世間というものをその存在さえ意識しないに違いない。常なきもの、憂きもの、術なきもの、と認識した時初めて世間の存在はその意識の上に浮び上ってくるのに違いないのである。憶良の世間に対する認識の仕方否定的なものであった。ということとはやはり彼が自己の裡に又世間に対し何かしら強い要求をもっていたことを物語るのに外なるまい。初めに要求があつてそれがこの現実の社会では就げられないと知った時世間及び自己を否定的に認識せざるを得なくなるのである。そしてその要求が強ければ強い程その要求が達成されない時の否定も又強いものとなる。その作品でくり返し述べられる憂し、辛し、術なしなどの語、或はその内容の消極的否定的傾向はやはりその欲求の念の強さを示しているものなのであらう。

憶良は欲求の念の非常に強い人間であった。そしてその劇しい欲求が終に遂げられなかったところに彼の悲劇があつた。と同時に悲劇的な生涯を送らねばならなかった彼も、その原因となった欲求の強さとその欲求の成就を許さない時代の制約との故に、思いがけない大きな代償を得たのであつた。その劇しい欲求が思い通りに達成されてしまえば恐らく彼は思索的な人生態度を摂らなかつたであらうし、従つて思想的に深められることもなかつたであらう。その欲求が遂げられなかった故に彼は思想的に深まりかつ文学衝動も得しめられその文学は生まれ出て来たのであつた。憶良の人間性の本質は実はこの点即ち巨大な煩惱の塊りにあつたのではなからうか。昇進を累ね名を立てるべき欲求、永遠に若く美しくありたい欲求、死せる愛児を哀惜する悩みなどがその作品から看取され、その悩みの強さ酷しさが読む者の心に触れるのである。

それと共に憶良の特質として彼が理性的合理的な性格であり知性の優れた人であつたことが従来からしばしば指摘されて来ている。これは彼の作品が明瞭に物語っている所であつて事実理性的であり知的であつたろうことは確信できる。憶良が明治以後に至るまで歌人としてその存在をほとんど認められなかったのは作品のこの理知的性格によるものであり、現在なお彼の評価が確定していないのも万葉集に類例を見ないこの特質によるものなのであらう。

私は憶良の作品の知的傾向をその作品の有つ諧謔性によつて認めている。例えば

憶良らは今は罷らむ子泣くらむそれ彼の母も吾を待つらむぞ
(卷三・三三七)

がその代表的な例として上げられる。宴たけなわの時その雰囲
氣に背を向けて中座し先に退出しようとするときの歌である。そ
うしたことは余程のことがない限り失礼に当るものなのに違ひな
い。憶良はしかも恐らく宴そのものに対する反撥から中座しよう
とするのであらう。公の席、宴会の席とは全く対照的な私生活の
面、家に残した妻子のことを詠い出したことから憶良のその意
識は認められよう。そして彼はこっそり中座しようとするのでは
なく堂々とその旨を宣言して退出して行くのである。まともな真
正直な歌であったならばその宴の氣分を打壊するものとなってしま
うに違ひない。いかに反撥感情からとは言ってもその点の顧慮は
除くわけにいなかった。老憶良は自己の眞の意圖を糊塗し一座
の哄笑のうちに退出しなければならぬのである。必然的に歌は
諧謔的にならざるを得なかった。

しかし諧謔によって人を和やかに笑わせることは非常にむずか
しいのである。なまじい諧謔を企図したりするとかえって趣味に
聞こえ逆効果を生じてしまう。諧謔は余程の知性がなければ不可
能なのである。憶良はまず「憶良らは」と自分の名を冒頭に詠み
込んだ。自らの名を自ら言うことはそれだけで既にユーモラスで
あり諧謔的である。最も卑下した言い方となるからである。人称
敬語の最も尊敬した言い方が出来得る限り漠然と呼ぶことによつ
てその対象を表現する、ということと全く逆な場合に當るわけな
のである。万葉集中作者が自らの名を詠み込んだ歌は他に一例だ

けある。長忌寸意吉麻呂の歌、「蓮葉はかくこそあるもの意吉麻呂
が家なるものは芋の葉にあらし」(卷十六・三八二六)がそれであ
る。しかもこの歌が卷十六の滑稽・諧謔歌の部に編入されてい
るのは示唆的であるし事実諧謔的な歌と言えるものである。そし
てその諧謔性は疑いなく「意吉麻呂が家なるものは」と自らの名
を詠み込んだところによつて醸し出されているのである。なお言
えば、数年前伊藤整氏が「伊藤整氏の生活と意見」を書きそのユー
モアと諧謔性とによる知性の卓絶さを賞讃されたが、そのユーモ
アと諧謔性とは作者自らがその本名をもつて登場したところに大
きな効果を生んでいたのであり、その影響として自分の名を自分
で言う諧謔性が知識人の間での流行となったことはなお記憶に新
しい事実である。その他この歌に於いては「それ彼の母も」と妻
を表現するのに言い渡んだ表現法をとっていることなども諧謔性
を構成する一要素として認められるであらう。宴席などで私生活
の面、妻や子のことを言い出すのもそれだけで諧謔的であるかも
しれない。妻や子に対する愛著を人に知られたくないのが人の常
であらう。公の席などではそうした感情を出来る限り殺して紳士
公人としての面目を保つのである。これは古代も現代もほぼ変り
ないことであらう。万葉集中妻や子を公の席で言い出したような
歌は勿論一首も見出すことが出来ない。諧謔はその効果を生かす
ためには真実すぎる程の真実、しかもその真実は人に知られたく
ないようなもの、人に知られれば嘲笑の対象にされるようなもの
を言わねばならないのである。憶良が罷宴歌に於いて妻と子とを
詠い出した意味にはそのような効果を生むための意圖も含まれて

いたのではなからうか。そしてその妻を言うのに「それ彼の母」と言い渡んだ形で間接に表現する、そこにも言いたくて仕方ないこともこうした公の席などでは言えない軽い苦しみのようなものが漂っていて、やはり笑いの効果を生んだのではなかったらうか。

更に憶良の諧謔性は「敢へて私懷を布ぶる歌」「貧窮問答歌」「病に沈みし時の歌」等にも表わされている。貧窮問答歌の次の部分は明らかに諧謔をそのねらいとしているものと思われる。「しはぶかひ 鼻びしびしに しかとあらぬ ひげかきなで 吾を除きて 人は在らじと 誇ろへど 寒くしあれば 云々」。憶良は確かに、吾を除きて人はあらじ、と誇りたい気持を持っていたものに違いない。本質的に欲求の念の強い個性をもち優れた才能と人に倍する努力とによって自負・自信の念は非常に強いものであったらう。しかし憶良はその誇りたい気持を真正面からは言わず「鼻びしびしに しかとあらぬ ひげかきなで」ながら誇るところに諧謔性が感じられ知性の強さが感じられる。又いかに誇ってみたところで一向寒さには変りがない、と言う所の諧謔性は豊かである。清水克彦氏は「びしびしに」という擬声音の持つ滑稽さに支へられているが故に、鬚かき撫で誇る人物そのものもまた、戯画化され、滑稽化されてしまっている」と言われ滑稽さを認められながら、しかし戯画化し滑稽化することが「貧窮者自身人中の人であると述べる強力な発言」を弱める結果になりこのような所に憶良の作品の曖昧さ不統一さがあると云ってられる。しかし滑稽さや諧謔性を支える知性というものは本来強い感情、劇しい欲求を自律的に抑圧するもの、のことを言うのでは

ないだらうか。とすれば憶良に知性を認めれば思想にも作品にも妥協や曖昧さを見出すのはむしろ当然と言うべきなのではなからうか。

このように憶良が理性的合理的であり知性的であったということとは非常に重要である。憶良は前に見た通り一方に於いては欲求の念の人なみ外れて劇しい人間であった。一見この両性格はあい入れぬ矛盾することのように思われ勝ちであるが、実は理性・知性と欲求の念の劇しさとは決して矛盾し合う関係のものではない。理性とか知性とか言うものは要するに自己の奔放な感情や強い欲求を自律的に抑制するものを言うのであらう。従って理性・知性と感情・欲望とは相対的なものであって、後者あることによって前者の働きは自覚されるものなのではあるまいか。そして更にその関係は比例的なものでもあって、理性・知性が強いということとは感情・欲望の劇しさがあって初めて必然されるのである。感情・欲望が弱ければ当然理性・知性も弱いものでよいことになるのであらう。理性的であるから感情の動きが少ないという言い方は誤っている。理性的である人間の内部にはその理性の強さに匹敵するだけの感情の劇しさが脈々と動き流れていなければならない。理性・知性は劇しい感情、欲求を自律的に抑圧する作用をもつものだと云ったが、それは又生きて行くために必須な環境への適応の無意図的な一方法でもあるのであらう。欲求のままに身を委せ奔放に生きて行きたいのがわれわれの本来である。しかし環境世界は当然のことながらそれを許さない。それどころか欲求のままに行動したならば必ず身の破滅を将来してしまふ。

そこで自からその欲求を抑えて環境世界に適合しなければならぬ必然が生じて来る。そしてその適合は無意図的に自律的に行なわれるものであってその役目をもつものが外ならぬこの理性、知性というものである。

憶良が生涯劇しい欲求を持ち続けたらうことは今はほとんど確定的なことがらなのであってその意識の現われが「土やも」の歌や「吾が主の」の歌となったものに他なるまい。しかもこの二首はただ憶良の欲求の劇しさを表現しているのみではなく前にもちよつと触れておいた通りそれ自身の中にその欲求を抑えつけようとしているらしいことが感得されるのである。この二首をよく読むとそこに年老いた、冷たく知性的な憶良の風貌が次第に輪郭をとって浮び上って来る。私がこの二首に諧謔の意味を見出すのは第三者的立場にあるからであらうか。憶良が自らの欲求の劇しさを知的に客観視していたと見ることはやはり想像の過ぎたことなのであらうか。罷宴歌に於いて又貧窮問答歌に於いて知性の働きの見た私はこの二首の場合にもその働きの見得るように考える。「寧楽の京師に召上げ給はね」と言う、この憶良の気持は常々持っていた要求をここでさらっと投げ出してしまったのであらうか。その劇しい欲求を何の拘泥もなく披瀝したもののなのであらうか。そう考えるにしては「敢へて私懷を述ぶる」の「敢へて」にひかかる。この語がある以上憶良は他のことを何も考えずただ思っていた通りをさらりと述べたわけではなかったであらう。言っではならぬ、言うべきでない、という常識の抵抗を自覚しながらなお言い出したもののなのであらう。つまりこれは一度自己の内

部で理知の濾過を通した後外部に吐き出された願いなのである。その時憶良は恐らく理知の批判をもって苦笑しながらその願いを外へ押し出したものではあるまいか。

「土やも空しかるべき」の歌にも同様なことが言えるであらう。「須ありて涕を拭ひ、悲しみ嘆きてこの歌を口吟ひき」とある左注をそのまま事実とすれば七十四歳にもなりながらなお現世的な執著から通れられない憶良に強い同情を禁じ得ないのであるが、それと同時にそう言った時の憶良は多分自らの執著の強さに自から困惑していたのではないかと想像させられるのである。七十四歳の自己を、「土やも」と言う、そのことだけでさへ何かしら彼の苦笑めいた泣顔が思い浮ぶ気がするのである。こうした知性の働きの憶良の最大の特色であったように思われる。知性の働きの即ち「土やも」や「吾が主の」の歌によって代表される現世的な要求の強さを、彼自身の内面でその内面の様相をはっきりと自覚することによって自律的に抑制しようとする強い知性の働きの、それが憶良の憶良的特色であったように思われる。

世の中を憂しと思ひ、やさし、辛し、術なしと思ひながら終に出家も遁世も出来なかつた憶良。この事実は極めて意味深いものを含んでいる。憶良の思想的被影響として仏教思想と儒教思想とが指摘されている。これはその作品から明らかに認められるのであって前記の常なし、やさし、辛し、憂し、術なしなどの否定的言辭はそのことをよく示していよう。そしてこれらの否定的言辭の多さから考えて儒教思想よりも仏教思想の方により濃い影響が認められるのであるが、と同時に次のような語や句の存在、歌の

内容などから考えると憶良の思想的被影響は単なる観念性だけに
よるものではなかったように思われるのである。「世間を憂しと
やさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」に於ける「飛
び立ちかねつ」「術もなく苦しければ出で走り去ななと思へど
子等に障りぬ」(巻五、八九九)に於ける「子等に障りぬ」「水
沫なすもろき命もたぐ繩の千尋にもがと願ひ暮しつ」(巻五、九〇
二)に於ける「水沫なすもろき命」の認識と「千尋にもが」との
対照、などがそれである。

世の中を憂しと観念し、脱俗出家してその苦悩から遁れようと
するのが仏教でありその教えである。憶良もそのことは知ってい
た。「術もなく苦しければ出で走り去なな」と思ったという告
白はそれを示している。脱俗遁世が苦悩から救われる唯一の道で
あることを知りその衝動をすら感じていた。しかし彼は残念なこ
とに翼をもつ鳥ではなかったのであった。それ故飛び立って現世
を離脱してしまうことが出来なかった。彼の翼をもぎとったもの
は「子等」であった。勿論「子等」は彼の内部に深く、障るもの
の存在することを象徴しているものである。その出で走り去
なな、と願う衝動を抑え妨げるものは何であったのか。それは
人間の生命が、水沫なすもろき、ことを十二分に知りながらなお
かつ、千尋にもがと願わずにはいられない人間の本質的要求で
あった。

憶良は確かに仏教思想の存在を知りかつその影響を受けた。し
かしそれを単に知識として知ったばかりでなく自からの欲望の劇
しさに困りぬいた自からの現実体験の上からもその考え方の正し

さを知ったのであろう。そして彼はその思想を体験的に知ったが
故にそれに身を委ねることが出来なかった。

理性の働きが諸々の欲望を自律的に抑制しようとする保身の働
きであるのに対し知性はその自からの欲望の劇しさを明瞭に認識
する働きである。憶良の理性は、世間を憂しと思ひ耻しと思ひ
術もなく苦しき思う 欲望の劇しさから来る感情の動きを自から
の内部に閉じ込めてしまった。しかしその事実には彼の知性は決して
無知ではなかったのだ。欲求の劇しさとそれに等しい理性の強
さ、その認識が顔を歪めて苦しく吐き出す彼の作品の数々となっ
たのであった。つまり彼が憂しと思ひ、やさし、辛し、術なしと
思ひながら終に出家も遁世もしなかったのは現実体験がその衝動
を許さずかつ知性の働きが出家遁世に変わるべきものとして歌と
いう代行手段を採用し、それによって出家や遁世とほぼ等しい効
果を上げ得たからなのであった。

憶良には相反する二つの面、二つの傾向がある。そこが思想詩
人としての憶良の、その思想の曖昧さ又は矛盾として指摘される
ところである。今私はその二つの傾向の依つて来る所以を私なり
の方法で探つて来たのである。即ち環境の面と個性の面とで、こ
の二つの傾向を生み出したものは何かと考へて来たのである。そ
の結果私は環境の面に於いて時代の可能性とその制約とが彼の場
合には相等しく作用するのを見た。又個性の面では憶良の人間と
しての欲求の劇しさを見、同時にその劇しさを自律的に抑制する
ものとしての理性の働きを見た。いささか図式的ではあるけれど

も環境と個性との両面に見られる相反する傾向がそのまま彼の作品に表わされているのではないかと考えるのである。

この相反する二つの傾向を指摘して憶良の思想を矛盾したものの曖昧なものと言われることが多いのは既に言った。確かに憶良のもつ二つの傾向は矛盾とも曖昧とも言い得るものである。しかしながらこの矛盾や曖昧さが論難の意味をもって用いられるならば私は賛成し難いのである。前記の川崎氏や清水氏の論はその真の意図はどうであろうとこの矛盾や曖昧さを指摘するだけに止まり、その意味や依って来る所を充分には説明してられないので論難の傾向のものとしか読み取れない。私はむしろ憶良の作品は、そして憶良の人間像はこの矛盾や曖昧さの故にわれわれに親近ししかも長く記憶されるのではないかと思うのである。

それは今憶良の場合で見えて来たように、われわれの生活が諸々の可能性と時代的社会的もしくは個人的環境世界の制約との相剋によって形成されているからである。可能性の面を押し進めた論理的、合理的な、肯定的な生は勿論われわれの願望であり憧憬であるが、けれども願望であり憧憬である故にその面のみに統一された生は非現実的となる。又制約と挫折との面を押し進めた感傷的否定的な、消極的な生は私個人の好みからはこの方により惹かれるものがあるが、この面のみで全生命を塗り潰すことは生きていく生身の自分が許さない。この二つの面のぶつかり合いがわれわれの生活を構成するものであり、又われわれの内部に目を注げばわれわれは常に奔放に生きたい人間の本来とそれを抑制すべき理性との相剋によって生命を実感しているものなのである。従っ

て本来の要求のままに奔放に生きる者には羨望は覚えるが自己との隔絶感は何にもなし難く、逆に理性的合理的にのみ生きる者にはその自負・自信の強さにやはり羨望を禁じ得ないが虚々しい非人間性を見ないわけにはいかない。

矛盾や曖昧さをその裡に含み様々な様相の見られる複雑なものそれ自体が人間の実状なのではなからうか。思想や文学が超人間でなければならぬ必要は勿論ないであらう。とすればその思想や文学が即人間的であることによって非難されるには当るまい。むしろ文学はその中に人間そのものを求めるものであるであって即人間的であることは当然感動を呼ぶものであり、それ故賞讃されて然るべきことだからなのである。

憶良の作品はその裡に矛盾と曖昧さとを含みその他諸々の要素をもった即人間的なものなのであってその点がわれわれに感動を与えらるものなのである。即ち彼の作品は曖昧さのもつ広がり、矛と盾との間に存在する大きな幅によって長く生き続けるのではあるまいかと思うのである。

註

- 1 「記紀万葉の世界」一七二頁。
- 2 西郷信綱、永積安明、広末保共著。「日本文学の古典」(岩波新書)三八頁。
- 3 「記紀万葉の世界」所収「山上憶良」
- 4 万葉集大成5 歴史社会篇所収「憶良の世界」。
- 5 滝川政次郎氏「日本社会史」五一頁。

- 6 谷 馨氏「山上憶良の生涯と作品」一三頁。
- 7 「日本社会史」参照。
- 8 大成5 歴史社会篇「万葉時代の貴族」(弥永貞三氏)一
二三頁参照。
- 9 選叙令五位以上条参照。
- 10 「日本社会史」五一頁。

五十嵐力先生遺稿

「昭和完訳源氏物語」

刊行賛助会員(予約会員)募集

- 一、内 容 源氏物語のもつ微旨幽韻を完全に發揮した、学
術的価値と芸術的香気の最も高い、名訳で、第
一帖桐壺から第三十四帖若菜上までを一冊に収
めて近く上梓いたします。
- 二、体 裁 B5判全一冊、九ポイント活字五九〇頁、総ク
ロース箱入美本。
- 三、配 本 少数限定豪華版で、目下校正中につき、印刷
製本出来次第、役員及び会員に限り配本いたし
ます。なお会員各位の芳名は、「昭和完訳源氏
物語」の巻末に誌し、感謝の意を表します。
- 四、会 費 金一、三〇〇円(一冊分)
- 五、申込方法 現金為替又は振替で直接左記にお申し込み下さ

六、申込先

い。(書店では扱いません。)

- 11 以上の部分は「万葉時代の貴族」による所が多い。
- 12 合計百十二名とあるがその内訳を合計すると百十一名き
り数えられない。
- 13 「記紀万葉の世界」一八九頁。
- 14 大成5「憶良の世界」より。

(一) 埼玉県飯能局区内入間郡日高町大字新堀

高麗神社社務所内 振替口座東京五七五三二番

五十嵐力博士「昭和完訳源氏物語」刊行
賛助会

(二) 東京都新宿区戸塚町一ノ六四七(振替口座東京
二七〇七三番)

早稲田大学国文学会

(三) 東京都新宿区東五軒町四九(振替口座東京三六
二五三番)

株式会社 学 燈 社

五十嵐力博士「昭和完訳源氏物語」
刊行賛助会

会長 窪 田 空 穂